



教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 © 1996 発行所 財団法人 精道教育促進協会 〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

キリストの使命と信徒の仕事

教会シリーズ 34

仕事は自分のためではなく人々のため

1 信徒にとって仕事はとても重要です。教会は人間の生活における仕事の重要性を知っており、仕事が社会・経済や政治のレベルでも宗教的なレベルでも、社会を構成する不可欠の要素であることを認識しています。宗教的レベルでは信徒の「在俗的特性」(教会憲章31番)という言い方がされます。信徒の大半は勤労者であり、仕事を通じて聖性への道を歩みます。このような確信から第二バチカン公会議は働く人々による仕事を救いのわざと関連づけ、使徒職に協力するものと考えています。(前掲書41番参照)

2 私は回勅「働くことについて」その他の文書を発表して、その他の文書を発表して、仕事の持つ価値、尊厳、さまざまな局面を、その卓越した偉大さを主眼にして述べてみました。ここではただ、次のことを思い出してください。仕事の偉大さや尊厳は、まず第一に神の創造のわざにあずかることに由来するのです。創造をめぐる聖書の記述が教えるように、「主なる神は人間をとらえてエデンの園に置き、そこを耕させ、守らせられた。」(創世2・15)その直前にある「地を支配せよ」という命令を思い出させます。(同1・28参照)回勅「働くことについて」にも書きましたが、「人間が神の似姿であることの一端は、地を従わせよと創造主から受けた委任に

3 第二バチカン公会議によれば(教会憲章41番)、仕事は聖性への道です。仕事は以下のような機会を与えてくれるからです。
a) 個人の完成。実に仕事は人格を發展させ、長所や才能を伸ばします。現代、多くの人々が職に就けないために味わっている、個人の尊厳がおとしめられたという感情を考えればわかるでしょう。全ての働く人の人格に関わるこうした局面に最大限の注意を払い、どんな場合でも人間にふさわしい労働条件が保障されるよう努めねばなりません。
b) 仲間の市民を助ける。全て

4 創世の書を見ると、神が定めた最初の夫婦に命じられた仕事(1・27・28参照)に従い、家族の幸福のために働く多くの男女に生きる意味が与えられることがわかります。人類の大部分を占める人々にとって、配偶者や子供たちへの愛は、働くための力ともなり動機づけともなるわけですが、その

5 次に、公会議が述べているポイント「それはしばしば重労働である」(教会憲章41番)について考えてみましょう。「額に汗を流して糧を得るだろう」(創世3・19)という聖書の言葉にもあるように、今日においても仕事に労苦はつきものです。回勅「働くことについて」に書きましたが、「労苦は人がみな経験することで、人みなに知られています。特別劣悪な条件のもとで肉体労働をしている人々によく知られていることです。知的な作業場で働く人々にもよく知られていることです。社会の側からも自分の家族からも当然の評価をもって認めてもらえずに、家庭と子

の人の善のために奉仕する、仕事の社会的次元がこれです。仕事は利己的ではなく利他的な行為であり、自分のためだけでなく、他の人々のためにも働くべきことを常に強調しましょう。
c) 社会と全被造物の進歩を促す。こうして仕事は歴史的・終末論的な、そして言わば宇宙的な次元を獲得します。仕事の目的は生命とこの世とを囲む物的条件をより良いものにするにあり、結果的に人間が神の招きに応じてより高い目標に到達するのを助けてくれるからです。万物を改善するための仕事という方向づけは、今日の進歩發展によつてますます自明のものになりました。それでも、創造主ご自身の望まれる目的に従って仕事をなすために、まだなすべきことが多くあります。
d) 行動に表われる愛をもって、キリストにならう。この点は後で詳しく考えましょう。

供の養育の日々の重荷と責任を背負っている主婦たちにもよく知られていることです。」(9番)

そこには倫理のみならず、言わば修徳に関わる次元があります。教会は仕事のうちに徳を見い出せと教えてきました。仕事に必要な努力のために勇気や忍耐の徳が要求され、こうして仕事は聖性への道となるからです。

6 労苦があればこそ、仕事

がキリストの贖いのわざの協力であることが一層はつきりとしてきます。神の創造のわざに参与することであるがゆえに、仕事は価値あるものであることはすでに明らかですが、それにはもう一つの面があります。仕事はキリストの生涯と使命にあずかるものとされたという事です。神の御子が私たちの救いのために人となられ、人々と同じ仕事に励まれたことを忘れてはなりません。イエズス・キリストは大工仕事をヨセフから学び、公生活の始まりまでその仕事を続けておられました。ナザレトではイエズスは「大工の子」(マテオ13・55)であり、ご自身も「大工」(マルコ6・3)として知られていました。ですからイエズスがたとえ話の中で人々の専門的な仕

事や女性の家事に言及したのも実に自然なことでした。これは回勸「働くことについて」にも書きました。(26番参照) イエズスは、最もつましい仕事にも敬意を払っておられます。神の子であるイエズスが、人間の仕事に対し最高の尊厳を与えることができ、事実お与えになったことは、主のご生涯の秘義の間でも最も重要な事柄です。人間としての手と能力で、神の御子は私たちと同じように私たちに共に、日々の糧を得るために労苦をもって働かれたのです。

7 キリストの模範からわかる通り、仕事は信者に対してその最高の目的、超越の秘義につながる目的を明らかにします。数多くの他の働く人々と変わらぬ仕事を模範として残し

た後、イエズスは救いをもたらす十字架のいけにえとなって、自分が遣わされた最大の目的と仰うべき大仕事、すなわち贖いのわざを成し遂げられました。カルワリオの丘で御父への従順をつらぬき、全ての人の救いのために身を捧げたのでした。従って、働く人は救い主のわざに一致することができるといいうわけです。公会議によれば、「大工の手仕事をしたキリスト、全ての人を救うために父とともに常に働いているキリストを行ないにあらわれる愛をもって模倣し、希望をもって喜び、互いに他人の荷を負う。」(教

会憲章41番) こうして仕事の持つ救いの価値は(ある意味で、近々数世紀の哲学や社会学の中にも見受けられるようになりま

すが)、贖いという至高のわざへの参与として、非常に高い次元で示されるに至りました。キリストの超越の秘義を透せば 困難も意味あるものになる

8 というわけで、公会議はどんな人でも「日々の労働そのものを通してより高い聖徳、使徒的聖徳にまでも登る」(前掲書)ことができる」と述べています。これこそ働く人々の高い使命です。物質世界をより良いものとするよう努めるのみならず、人間と万物の現実を霊的に変えて行くのです。それは、超越の秘義の力で可能になります。

困難と苦しみ、それは仕事の労苦自体からも仕事をめぐる社

望んだ」(2番)と述べています。何と偉大な秘義でしょう。教会の子供たちを驚きと喜びに包んでやみません。人間の心がたえず求める神は、近づくことのできない沈黙のうちに留まる御方ではありません。「人々を自分との生命の交わりに招き、これにあずからせるために、あたかも友に対するように人間に話しかけ」られます。(同) このように、啓示とは単に知性に向けられた一連の真理ではな

会状況からも生じますが、どちらもキリストの贖いのいけにえにあずかるものですから、人類のために超自然の美りをもたらします。聖パウロの言葉を借りれば、「全被造物が今まで嘆きつつ陣痛の苦しみに会っていることを私たちは知っています。そればかりではなく、霊の初穂を持つ私たちも、心からのうめきをもって自分のからだを贖われることを期待している。」(ローマ8・22、23)

信仰によるこの確信は、使徒の歴史的・終末論的なビジョンの中で、希望に満ちた断言の基盤となっています。「今の時の苦しみは、私たちにおいて現われるであろう光栄とは比較にならないと思う。」(8・18)

(九四・四・二〇)

く、何よりも生命の交わりへの招きなのです。それは救いの歴史です。限らないやさしさで、創造主は被造物の歩みに付き添い、自らの内的生命の秘義すなわち御心の秘義を少しずつ明らかされました。ついにイエズス・キリスト、人々の救いのため人となられた神のみことばによって、神の啓示は完成されます。

「神の啓示に関する教義憲章」

生命の交わりへの招き

第二バチカン公会議を振り返る その4

兄弟姉妹の皆さん。

第二バチカン公会議の諸文書についての考察を続けていきますが、今回は「神の啓示に関する教義憲章」(以下、啓示憲章「デイ・ヴェルブム」の番号のみ)について考えてみ

たいと思います。公会議の教父たちはこの文書で、キリスト論の根源をなす重大なテーマである神の啓示を取り扱いました。公会議は「神はその愛と英知によって、自分を啓示し、また意志の奥義を明らかにしようと

「聖なるロザリオ」ホセマリア・エスクリバー著……十五玄義の黙想のしおり。定価一三二六円

「ナザレトのマリア」フェデリコ・スアレズ著……歴史学者の目で黙想する聖母の生涯。定価二〇〇〇円

喜びあふれる宣言にあります。その宣言はまず、救いの

◆いずれも送付料一冊三〇〇円。お問い合わせ・お申込みは精道教育促進協会まで。

出来事の証人となった人々の生きた言葉として現われ、その後聖書に記録されました。聖書のために靈感を送られたのは神です。神こそ聖書の著者と呼ぶべきです。こうして神の啓示は、聖伝と聖書によって、完全な形で伝えられます。聖伝も聖書も「同一の神的起源を持ち、ある程度一体をなし、同一の目的に向かっている。」(9番)

「聖伝と両約聖書はいわば鏡のようなもので、地上を旅する教会は神があるがままに、面と面を合わせて相見する時まで、神に全てのものを賜わりながら、その鏡の中に神を見るのである。」(7番)

とは言え、従順ではあっても受け身ではなかった人間である著者たちは、聖書本文に彼ら自身の個性を刻んでいます。その時代の痕跡や限界が残されているのです。ですから、聖書に近づくには「健全な解釈」が必要になります。何よりも、聖書を読む時には教会と一致していなければなりません。神の言葉は聖霊の特別な助けを約束された教会に委ねられているからです。教会の教導職は神のみことばの上に出るものではなく、そのしもべに過ぎませんが、こうして神の言葉とその真理の富を敬虔に聞き、清く保存し、忠実に説明することができるとい

す。(10番参照)

「啓示意章」は、神のみことばをさらに一層、福音宣教や個人生活、教会生活、教会一致の価値基準とするための大きなきつかけとなりました。三十年後の今、公会議の基本的な指示が全キリスト教共同体で十分に受け入れられたかどうか、勇気を出して自問してみなければなりません。

「啓示意章」は、神のみことばをさらに一層、福音宣教や個人生活、教会生活、教会一致の価値基準とするための大きなきつかけとなりました。三十年後の今、公会議の基本的な指示が全キリスト教共同体で十分に受け入れられたかどうか、勇気を出して自問してみなければなりません。

教皇さま、機内インタビューを受ける

ローマからグアテマラに向かう飛行機の中で教皇さまはジャーナリストたちとのインタビューを行ない、社会正義について、たびたび司牧訪問を行なう理由について、最近のラテン・アメリカ情勢について、いくつもの質問にお答えになりました。その中で教皇さまは、世界各地へ司牧訪問におもむく基本的な理由は、たとえ政治情勢が不安な所であろうとも、人々と出会うためであることを重ねて強調しておられます。

「最初の司牧訪問のとき…」

一九七九年のメキシコ訪問を振り返りつつ、教皇さまはお答えになりました。「大統領代理の歓迎を受けました。大統領自身は非公式にということと空港に現われ、私人として話をしました。しかし今日では、教会と国家の関係は正常化しています。思うに、外面的な組織そのものはあまり問題ではないのです。大事なものは人間です。私の会った最初の大統領が言ったことを今でもよく思い出します。『超現実的な国へ来られたわけですね。全国民がカトリックなのに政府は反カトリック、もし

くは不可知論者なのですか。』」

「メキシコは私の人生と個人的経験の中に今も生きています。最初の訪問から、道は開かれています。もしもメキシコが旅程に入っていないと困難にポーランド行きはもつと困難になっていたでしょう。メキシコは、私が教皇として故国を訪れるための道を開いてくれたのです。」

神の民に会いたいという願いは、ニカラグアへの最初の困難な旅の目的でもありました。「ニカラグア行きはまるでとんぼ返りでした。」と教皇さまは振り返ります。「しかし生きて戻りました。それからは何もかも変わりました。今ではオルテガ自身、何も問題ないと書いてきています。全てが変わったのです。彼はおぼえていないようですが、以前には人々に会うのはそれほど簡単なことではありませんでした。」

「社会問題、社会の不正の問題は」と教皇さまは強調して、「ある程度まで世界全体に関わるものです。様々な形の不正は第一世界、アメリカやヨーロッパにも存在します。これは確かに、社会と教会に突き付けられた挑戦であり、正義について述べる教会の社会教説がいかにタイムリーなものであるかを物語っています。暴力はしばしば暴力を生みます。今世紀、人々を抑圧する体制が各地で崩壊した時、起こったように。民主的な解決を求めなければなりません。社会による自由と正義の原則が必要ですが、実際どのようにするのかが別の問題ですが、原則は有効です。」

「一九八九年のソビエト崩壊後、中央アメリカは大きな変化を迎えました。最初の訪問の時、ラテン・アメリカは二大陣営が向かい合う戦場のように感じられました。そのため貧しい人々は苦しみ、自立もままなりません。これから経済状況はどうなるのでしょうか。人々は不当な仕組みを改めて行けるでしょうか。」

社会正義の問題と深く関わるのは、先住民の状況です。数年前から、いわゆる「解放の神学者」たちがこの問題を論じていますが、「問題なのは」と教皇さまは力を込めて、「ことが政治のみならず社会正義に関わっていることです。解放の神学はマルクス主義に近いものです。先住民の問題は社会正義に関わ

(九五・十一・五)

不変の教え

る事柄です。この人々はもともとその土地の主だったのに、少数派としておとしめられてきたのですから。社会正義は、彼らが経済的にも社会的にも文化的にも、平等の権利をもって扱われ、社会の中で確固たる地位を占めることを求めています。でもそれは社会闘争や倫理闘争とは別の事柄です。もう一つの問題は、ラテン・アメリカ各国の豊かな土着文化をいかに保存するかです。たしかポリビアだっ

たと思いますが、ある大統領は、先住民は道徳的に純粹であり高潔な人々ではあるが、自ら何かを企て、行動する気が乏しいと語っていました。もちろん力で押しつけることはできませんが、やる気を引き出す条件を整えることはできます。学校や大学を造り、彼らが教育を通じて社会地位を高める道を用意すべきです。」

カラカスのジャーナリストが、教皇さまはベネズエラの人々にどのようなメッセージもたらすつもりかと尋ねました。「私が見たいのは福音のメッセージと、福音が常にへ良い知らせであるということですねばなりません。福音には強い言葉も含まれているのです。でも、おおむねは良い知らせに由来するアドバイスです。コロモトに行くのは初めてですが、前回はカラカスでコロモトの聖母の前でミサを捧げました。昨年ベネズエラには初めての福者が誕生しました。これは教会と国家において、カトリック信者にとつては常に重大なことです。一般に、教会の歴史は聖人によつて判断できますが、とりわけ最初の聖人、最初の殉教者が

大事です。福者聖ヨセフのマリアはベネズエラ初の聖人です。」

(三) (訪問予定の) グアテマラ大統領が襲撃されたと伝えられる事件について、「まだ詳細も、襲撃の動機もわかっていませんので」と答えられたが、「私の第一の目的は教会の民に会うことです」と重ねて強調された。「大統領は市民社会の首

教会は子らに豊かな命を与える

「エルサレムよ、喜べ！」(イザヤ66・10)

預言者の言葉は、聖なる町と共に喜ぶよう、私たちに呼びかけています。今日届いたこの呼びかけはまことに時機を得たものです。地上の旅路は人間の利己心が引き起こす悲しみと嘆きに満ちていますが、神は自分を恐れる人を自ら慰め、喜ばせてくださいます。

エルサレムは私たちの故国、母なる町です。それは教会のカタドリです。キリストを信じる人々が、町と共に嘆きに伏した後、慰めを受ける場所です。教会はキリストの苦しみにあずか

長ですから、まず会いたいと思っています。多分会えるでしょう。」今年中にサラエボを訪問できるかという問いに対して、「今年中に可能かどうかはわかりませんが、可能であることを希望します。いま考慮中です。クリスマス中サラエボに滞在したルイニ枢機卿は、人々が私を待っていると語っていました。」

最後に、教皇さまはキューバ訪問の可能性について質問を受けた。「私もそれが知りたいところですね。今のところ、わかりません。ラテン・アメリカでまだ訪ねていないのはガイアナとキューバだけです。考えておきましょう。聖地へも行きたいと思いますが、すぐにはというわけではありません。巡礼はまだ計画中です。」(九六・二)

最後に、幸いな処女マリアに注目したいと思えます。福音書は、マリアを教会の模範、キリストの完全無欠な弟子として示しています。

シオンの娘マリアはメシアの母として選ばれ、全人類のための尽きぬ救いの泉がその胎からわき出しました。マリアは最初の宣教師であり、その名は天の国に書き留められ、心は喜びにあふれました。マリアは新しい被造物、恩寵に満ちた無原罪の御方です。それは十字架にかけられたキリストの力によるものです。

マリアよ、御身と共に、救い主なる神において喜び、この世で神の国の証人となることをお教えください。アーメン。(九五・七・九、パチカン庭園のルルドの洞窟前にて。)

りますが、常にその慰めにもあずかります。(IIコリント1・5参照)

教会はその子らに豊かな生命を与え、神の言葉と秘跡で養い育て、子供たちを恩寵の河の流れのように全地の至る所へと運びます。

福音書の記述によれば、イエズスは弟子たちを先に町や村へと宣教に遣わしています。彼らは神の国を言葉と行ないで、キリスト自身がなさったように宣べ伝えました。祝福を与え、キリストのみが与えることのできるあの平和を宣べ伝えました。ある日、パウロもその一員と

して加わり、模範的な弟子となりました。主ご自身がパウロを選び、ご計画に従って改心させ、恩寵で形作り、「新しい人」(ガラタイア6・15)とされたのです。こうしてパウロはキリストの十字架の偉大な使徒となりました。十字架は彼のただ一つの誇りでした。十字架の内へのみ人類の生命と希望があることを知っていたからです。

パウロは十字架の力を身にしてみて体験し、そのしるしを身に帯びていました。神の国を宣べ伝えるためキリストによつて遣わされた弟子は、自ら親しく十字架を帯びているのでなければ、福音が神の愛をその心に刻み込んでいなくてはならず、決して福音の良き種まき人にはなれないでしょう。宣教師は常に、何よりもまず証人・生命と希望の源である十字架の証人な

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙。毎月十日発行。定価 一部百八十円(送料別)。

■一年予約 送料とも一〇五〇円から。詳しくは精進教育促進協会まで。

郵便振替
01130-
8-72393

説教・講話・書簡等の抄訳

生命を守る御母マリア

★ 天の元后、喜びたまえ！
キリストの御母、喜びたまえと呼びかけながら、教会は受難の夕べ、主が高間で言われた言葉を心にとめています。

「婦人は子を生む時苦しむ。その時が来たからである。だが子を生んでからはもう生みの苦しみを忘れる。この世にひとりの人間が生まれ出たことを喜ぶからである。あなたたちも今は悲しんでいるが、再び私に会う時、あなたたちの心は喜び、もうその喜びの奪われることはない。」(ヨハネ16・21-23) 教会も使徒たちにならい、キリストのこの言葉を自分自身のものでします。そしてまず救い主を生んだ方に向かって呼びかけるのです。「天の元后、喜びたまえ！」それは母である教会の喜びを表わしています。教会は主の御母と同じ喜び、復活が明らかになり、神において永遠に続く、生命の喜びを共にします。

★ 子供を生む母親のイメージと、羊のために自分の生命を捨てる良き羊飼(ヨハネ10・11参照)のイメージとの間には、深い関連があります。愛のため自分の生命を捧げる者は、新たな生命を受け取ります。まことに「愛は死のようによい。」(雅歌8・6参照)だからこそ復活の真理が、地に落ちて死に、多くの実を結ぶ麦の粒にたとえて語られるのです。(ヨハネ12・24参照) (…)

ザイルの若き殉教者イシドール・パカンジャ、さらに、生命を捧げる良き羊飼いの秘義が二人のイタリヤの母親の並みはずれた生涯に繰り返されたことを喜びましょう。二人とも独自の仕方で家族のため生命を捧げました。エリザベット・C・モラは家族の愛と一致のため生涯を捧げ、ジャンナ・B・モツラは胎児のため生命を捨てました。こうして二人は、全教会が神に捧げる大いなる祈りに声を合わせます。母としての犠牲の祈り、最高の愛の祈りは彼女らのもので、他の者のため生命を与える以上の大きな愛はありません。(ヨハネ15・13参照) こ

れは母親が子供のために生命を捧げる時、自分の生命と引きかえに、生まれてくる子供に生命を与える時、比類のない仕方を実現します。

★ 天の元后、喜びたまえ。御身のように他者のため生命を捧げる用意のある、全ての母親たちの母性は御身のもの。

★ 復活節の間、教会は黙示録を読みます。天に現われた壮大なしるし、太陽をまとった婦人。婦人は子を生もうとしていました。使徒ヨハネは赤い竜が現われて、生まれる子を食おうとしているのを見ました。(12・1-4参照)

この黙示録のイメージは、復活の秘義に通じています。教会は神の御母の被昇天の祝日に再

度この描写を示します。それは現代にも通用するイメージです。生命に対する全ての脅威が子を生もうとする女性の前に立ちあがる時、私たちは「太陽をまとった婦人」のもとに駆けつけ、生まれる前からおびやかされている全ての子供たちの生命を母の心づかいで守ってください。多岐にわたるよう願います。多くのキリスト教共同体で祝された御母に捧げられた五月という月に、私たちは生命の御母、美しい愛の御母に注目します。五月は特別に聖母の月です。祈りを通して、人間家族の基盤となる愛と生命に奉仕できればと思います。

★ 祈りによって強められ、エフエゾ人への手紙にあら

る霊の戦いに立ち向かうことができずように。「主において力を受け、その力によって自分を強めよ。」(エフエゾ6・10) 黙示録は同じ戦いについて述べ、大天使ミカエルの姿を描き出しています。(黙示録12・7) 前世紀の終わりに、教皇レオ十三世はその場面を眼前に見ているかのように、聖ミカエルへの特別な祈りを教会に広めました。「大天使ミカエル、霊戦に当たりて我らを助け、悪魔の凶悪なるはかりごとに勝たしめたまえ。」

★ 皆さんどうぞ忘れずにこの祈りを繰り返してください。闇の力とこの世の霊に戦いを挑む力を得るために。(…)

「聖母マリアと教会」シリーズ(3)

十字架上のキリストに結ばれた聖母

1 「処女マリアは真に神の母、贖い主の母として認められ、称賛されている。」(教会憲章53番) この言葉で、公会議は贖いとマリアの母性との関連に注意を向けています。その母としての役割が知られ

て以来、最初の数世紀からマリアはイエズス・キリストの母なる処女、従って神の御母として教会の教えや礼拝の中で称えられてきました。中世になると教会の信心や神学的な考察が、救いのわざにおけるマリアの協力

ぶりに光を当てています。こうした時代差は、教父たちや初期の全教会会議の努力が、言わばキリストとは何者かという問題に集中していたという事実によって説明がつかず。教義の他の側面は必然的に後回しになりました。啓示された真理は、ただ少しずつその豊かさを現わして行くにとどまりました。時代が下ると、マリア論はキリスト論のつけた道をたどるようになります。マリアの神性、つまり神の母であること

説教・講話・書簡等の抄訳

教皇様の声・5月号付録

自体はエフエゾ公会議で宣言されましたが、それはキリストのペルソナが一つであることを確認するためでした。同様に、救いの歴史におけるマリアの存在についても深い理解が見られたのです。

2

二世紀の終わり頃、ポリカルポの弟子である聖イレネオは、すでに救いのわざにおけるマリアの貢献を指摘しています。彼はお告げの時のマリアの同意が、いかに重大なものであったかを理解していました。天使のお告げへのナザレトの処女の従順と信仰が、エバの不従順と不信仰と正反対のものであり、人類の運命に幸いな結果をもたらしたことを知っていたからです。実に、エバが死をもたらしただけで、マリアは「はい」と答えたことにより自分自身と全人類の救いをもたらすことになりました。(異端論駁 III, 22, 4; SC 211, 441 参照) しかし、この確信が他の神父たちによって体系的に継承発展させられることはありませんでした。

マリアは全人類の霊的な母となられた

ようやく十世紀の終わり頃、この教えは、幾何学者と称されるビザンティンの修道士ヨハネが「マリアの生涯」という書物

の中で明らかにしました。こうしてマリアはキリストの贖いのわざ全体と結び付き、神のご計画に従って私たちの救いのために十字架の苦しみにあずかった、とされたのです。マリアは今も「全ての行ない、思い、祈りにおごとく」(「マリアの生涯」 Bol. 196, f. 123 v. 参照) 御子と一致しています。イエズスの救いのわざとマリアとのつながりは、聖霊に鼓舞され、大いなる力を受けたマリアの母性愛に由来します。感情に左右されない愛が、最も憐れみ深い愛です。(前掲書 Bol. 196, f. 123 v. 参照)

3

西方では、聖ベルナルドに注目し、イエズスの奉獻について述べています。「まことに聖なる処女よ、ご胎内の実りである御子を主に奉獻してください。私たちの和解のための、神によみせられる天のいけにえをお捧げください。」(お潔めについての説教 6, 2. PL 183, 370)

聖ベルナルドの弟子で、友人でもあったシャルルのアーノルドは、特にカルワリオでのマリアの犠牲に光を当てています。彼は十字架に「二つの祭壇」を認めました。一つはマリアの心の中に、もう一つはキリストの

身体に。「キリストは身体を捧げ、マリアは心を捧げた。」マリアはキリストとの深い一致のうち霊的に自らを捧げ、世の救いを請い願いました。「母の願いなら御子は聞き入れ、御父はお許しになる。」(「十字架上の主の七つの言葉」 3: PL 189, 1964 参照)

4

この時代から他の著者たちも、贖いのいけにえにおけるマリアの特別な協力という教えについて説明するようになりま

す。同じ頃、キリスト信者の礼拝や信心に、マリアの「御憐れみ」への熱心な考察が見られるようになります。悲しむ御母は心を打つ姿で描かれま

す。マリアが加わることで、十字架のドラマは一層人間らしさを増し、信者が秘義を理解する助けとなりました。御母の悲しみは、御子の受難を鮮明に描き出します。

5

マリアの霊的・普遍的な母性は、キリストの贖いのわざにあ

ずかっただけに見て取れます。東方では幾何学者ヨハネがマリアを「御身は私たちの母」と呼び、「私たちのために忍ばれた悲しみと苦しみのゆえに」感謝を捧げています。また、救いの対象となる全ての人への母としての愛と、母親らしい心づかい

に対して注意を促しています。「ビザンチン伝統における至聖処女の被昇天」 A. Wenger 著の中の「栄光に満ちた婦人・神の母の永眠に関する話」 P. 407 参照)

6

西方でも、霊的母性に関する教えは聖アンセルモと共に発展しました。「あなたは…和睦と、和睦した者の母、救いと、救われた者の母。」(「祈り」 SC: PL 158, 957A 参照)

神の御母として称え続けられてきたマリアですが、同時に私たちの母でもあるという事実は、その神の母としての面に新しい局面を与え、私たちのうちにマリアとのさらに親密な交わりの道を開いてくれます。

7

マリアが私たちの母であるという事実は、ただ愛情のきずなによるだけではありません。その功績と取り次ぎによって、聖母は私たちの霊的な誕生と、内に秘めた恩寵の生命の成長のために効果的な貢献ができるのです。これこそマリアが「恩寵の御母」「生命の御母」と呼ばれる理由です。

生命ある全てのものの母 「生命の御母」の称号は、すでにニッサのグレゴリオが用い、福者イグニのゲーリック(一一五七年没)が解説しています。「マリアは生命ある全ての者の母。この世に生むのみならず、生ける全てのものを再生させる。ただ一人の誕生によって私たち全員が生まれ変わる。」(被昇天のミサ 1, 2: PL 185, 189)

8

十三世紀のテキストでは、生き生きとしたイメージを使ってこの再生がカルワリオでの「苦しみに由来することを語っています。その苦しみによってマリアは「全人類の母となった」とされています。まことに「その清い胎内で、憐れみをもって教会の子らを見ごもった」のです。(O 28, Part 3)

第二バチカン公会議はマリアが「救い主のわざに全く独自の方法で協力した」と述べ、「このためマリアは恩寵の世界においてわれわれにとって母であった」と結論します。(教会憲章 61 番) マリアは全人類の霊的な母として御子のそばにおられるという教会の直観はこうして確認されました。

マリアは私たちの母です。慰めに満ちたこの真理は、教会の愛と信仰によってより深く明らかに示され、私たちの霊的生活を支え続けると同時に、困難の中にあっても信仰と希望を保つよう励ましてくれます。(九五・十・二五)